

# 「ことばの暴力」に着目した大学生の恋愛とジェンダー

長 安 めぐみ・小 林 陽 子

## **The effects of verbal abuse on gender and love relationship among college students**

Megumi NAGAYASU and Yoko KOBAYASHI



# 「ことばの暴力」に着目した大学生の恋愛とジェンダー

長安めぐみ<sup>1)</sup>・小林陽子<sup>2)</sup>

1) 群馬大学男女共同参画推進室

2) 群馬大学教育学部家政教育講座

(2016年9月30日受理)

## The effects of verbal abuse on gender and love relationship among college students

Megumi NAGAYASU<sup>1)</sup> and Yoko KOBAYASHI<sup>2)</sup>

1) Gender Equality Office, Gunma University

2) Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 30th, 2016)

### 1. 緒言

近年、若者は「恋愛に不活発」という指摘が多く見受けられるようになった。5年に一度実施される「出生動向基本調査(2015年)」によると18歳~34歳未満の未婚者で「交際している異性はいない」と答えた割合は、男性69.8%(前回61.4%、前々回52.2%)、女性59.1%(前回49.5%、前々回44.7%)で、異性との交際の状況は低調なまま引き続き増加している。

その原因の一つとして「男性の恋愛における不活発層の増加」があげられる。若者が目にするドラマや映画、漫画の世界では、デートもセックスも男性が異性に対して積極的にアピールするモデルが一般的である。ジェンダーの非対称性が顕著な日本社会では「恋愛や性行動において男性がイニシアティブを取る」ことが恋愛では常に期待される。そのため「消極的な男性が取り残される」と考えられてきた。

しかし、それに加えて「女子の側が交際自体に無関心になっている」と学生の意識調査を定点で続け

てきた渡辺は、改めて指摘している。その根拠として、1999年と2009年の調査を比較すると「恋人がほしいと思わない」男性は22%(前回17%)であるのに対して、女性は39%(前回27%)と大きく差をつけていることを示している。特に女性において、近年交際に対して無関心な割合が増加してきていることが、「若者が恋愛に不活発」な大きな要因であると指摘している(渡辺・2010)。

だがその一方で、若者の恋愛では「依存的な愛」(ニッキーシー・2000)と指摘されるように、パートナーとの健全で適正な距離が取りにくくなることもある。「恋人が誰かほかの人と楽しくやっているのでないかと考えるだけで自分がみじめになる」等の思いから、パートナーへのDVやストーカー事件として、警察の介入を受けるような「親密なパートナーの暴力(Intimate Partner Violence: IPV)」に至る危険性がある。

## 2. 親密なパートナーの暴力と恋人間暴力

IPVは、「生活の多くをともにし、親しく近い関係」(小西2001)で起こる暴力であり、社会の中で「健康を阻害する公衆衛生の問題」であると指摘される。交際相手、パートナー、配偶者等、呼び名や既婚・未婚といったカテゴリーに関わらないため、「恋人間暴力」もIPVの一連としてあげられる。IPVの概念が一般化している米国では、1960年代後半から配偶者間暴力(同棲や事実婚を含む)、Domestic Violence(以下DVと記述する)に関する問題が社会で表面化し、1970年代、女性たちによる被害者支援の草の根運動の実践を経て、1980年代以降、恋人間の暴力を含んだIPVが新たな問題として着目されるようになった(レビー・2008)。

中でも注目を集めた一冊が*You Can Be Free: An Easy-to-Read Handbook For Abused Women* [Ginny NiCarthy, Sue Davidson] 1989である。そのタイトルにもあるように、DVの暴力や被害者の心理状況についての細かな具体的なチェック項目があげられており、親密な関係における暴力の構造について、解りやすく説明されている。被害の渦中にある女性たちが、チェック項目を通じて、恋人や夫との関係を振り返り、自身の暴力問題に向き合うことができるすぐれた構成になっている。

本書は日本でも、女性や子どものための民間シェルターのスタッフや行政の相談員たちの手(むらさき舎)によって翻訳され、2000年に『夫・恋人の暴力から自由になるために』として出版された。1995年、北京で開催された世界女性会議での「女性に対する暴力の根絶」の大きなムーブメントに伴い、日本においても2001年「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」、配偶者暴力防止法が施行され、行政の課題として「被害者支援」が本格的に動き出した時期でもある。本書は、被害者支援に係わる支援者によって読み込まれ、そのチェック項目は、現場の支援者の間で活用されていった。

## 3. 恋人間暴力の特性

2003年、山口によって若者の「恋人間の暴力」、Dating DVの概念が日本で初めて紹介された。新たに「デートDV」という用語が造られたことで、若者の恋人間の暴力への認識と関心は、徐々に日本社会にも広がっていった。山口は『デートDV防止プログラム実施者向けワークブック』において、デートDVについて「親密な関係における若者の間の暴力」と定義している。具体的な事例を示し「彼らの共通点はセックスをしていること。女の子はNOということで彼に嫌われたくないと思っている」と性的な関係が誘引であると指摘する(山口・2003)。

また、畑下らは、デートDVに関する海外のブックレビューを通して、その特質を「デート相手に取る暴力的な態度や行動」としている。そして、Carlsonの「デートDVは大人のDVとは異なり子どももなく、パートナーの家族との関係もなく、法的結びつきもない。デートDVは大人のDVとは切り離して考えるべきではないか」という主張を引用し、Lanerの「両者には葛藤と攻撃という共通性がある」という主張も合わせて引用しながら、大人のDV以前に起っているデートDVの実態をとらえ、さらにその対策を取っていく必要性を説いている。

さらに、アメリカで若者の非暴力教育に携わっている大藤は、デートDVの暴力の特性について「ロマンティックな親密な関係の中で、不平等な力関係を構築し、支配し、言葉での、そして感情的、肉体的、性的、経済的、社会的な被害を片方に、あるいは両方に及ぼす」と分析する。そして、恋愛関係において、男性も女性も双方において、被害者にも、加害者にもなる可能性がある」と指摘している(大藤・2008)。両性が暴力の加害被害ともに係わるという示唆は、若者の恋人間の暴力を理解する上でも重要である。

恋人間の暴力は、青年期という人間関係に敏感な時期と相まって大きな影響を与える。金政によると「青年・成人期での恋愛関係は、他の社会的関係とは異なり、二者間の結びつきが非常に強い愛着関係」にあり、「また、それゆえ、それら二者間には、第三

者の介入を拒む排他性が作用する」と恋愛関係を母子関係の愛着に替わる深い係わりであると指摘している。さらに「不安定な愛着傾向は、怒り、悲しみ、不安といった感情の経験しやすさと関連する」こと、その中でも「関係不安は、恋愛関係での嫉妬や未練といった感情の経験し易さと関連する」との興味深い知見を示している（金政・2006）。

このような心理的な愛着関係にあり、恋愛関係にある親密なパートナーからの暴力によって、心理的な安全な距離や境界が脅かされ続けることで「恋愛関係における二者のあいだ（別れた恋人を含む）の支配／被支配関係、虐待状況、主体性の侵害」を招くと、加害者の更生プログラムを実践する伊田は、警鐘を鳴らしている（伊田・2010）。

そして、恋愛間の暴力の被害者は、配偶者間のDV被害と同様に、「殴る・蹴る等の身体的暴力に限らず、人格を否定するような暴言や無視、脅し等の精神的暴力、性行為の強要や避妊の非協力等の性的暴力をはじめとする多様な暴力（友田・2007）」を複合的に体験する。その中でも、特徴的なのは心理的な暴力である。内閣府の調査（2014）では、10～20歳代に受けた交際相手からの“心理的攻撃”の経験は15.2%であり、この攻撃において「ことばの暴力」は重要なファクターである。

「ことばの暴力」は、心理的な暴力の中でも高圧的な言葉や態度から始まる暴力のことを示すが、単に「高圧的な」ばかりではなく、相手の落ち度を責める「愚痴」や貶めるような「悪口」であったりする場合もある。些細な一言が度重なり、攻撃の「ことば」に変容していくと思われる。その点では、身体的な暴力が徐々にエスカレートして、死に至るような重篤な暴力に発展していく様相と重なっている。

ケータイ小説「恋空一切ナイ恋物語」は、2005年に“ガールズサイト”といわれる女性むけのホームページでの掲載が始まり、2006年に書籍化、2007年には映画化された。「ステキな恋にあこがれるミカ。そしてついに出会った運命の人ヒロ。傷つきながらも、幸せだったあの頃——。ケータイ小説史上最高のラブストーリー」と広告され、作者である美嘉の実話として、若者の間で共感を呼び、マスコミ

でも話題となった。

ここで登場するミカ最愛の人は、粗暴で強引だ。

「来い！」「いくぞ、ミカ」

「オレのミカにさわるな」

「オレの女をいじめるやつはゆるさねー」

「ミカはオレが守る」

「ミカが殺してほしいならこいつを殺す」

ヒロは、ミカを自分の所有物のように扱い、ミカが何度止めても、ミカと周囲を巻き込み傷つける。物語の中で、ミカは心理的な暴力、性的な暴力を複合的に振るわれる。ヒロのコミュニティ自体、とても暴力的であり、ミカを傷つける。しかしそのような暴力的な状況であっても、タイトルが示す「切ナイ恋」というロマンティックな表現（デートDVの被害相談の中でも度々聞かれる言葉ではあるが）が、暴力の存在を見えにくくする。

そして、被害当事者であるミカは、了解不能な相手からの束縛や暴言、暴行を否認し、大したことないと矮小化する中で、恋人との関係を続けていく。この場合、解決に向けては当事者同士が「暴力に気づくこと」がなにより大切であるが、そのためにも、二者間のコミュニケーションのあり様について目を向けてみることは、その暴力的な関係性を客観的に測ることに繋がり、重要な指標になると考えられる。

#### 4. 研究枠組みと倫理的配慮

本稿では「ことばの暴力」に着目し、パートナー間のコミュニケーション（態度等非言語を含む）に潜む加害・被害の意識を読み解いていくために、若者の恋愛とパートナーとの「心理的」「身体的」「物理的」な安全な距離とIPVにおける「ことばの暴力」の2点に着目し、調査を実施しその結果について考察を行った。

調査の実施にあたり、対象者には、事前に研究目的を持った調査であることを伝えた上で、同意した者だけが回答した。分析に際しては、個人が特定されないよう十分に倫理的な配慮を行った。

### 5. 調査概要

#### ①若者の恋愛とパートナーとの安全な距離

関東地方の大学生 105 名（女性 66 名・男性 38 名・未回答 1 名）を対象に「大学生の恋愛観とところに対する暴力」の質問紙調査（2016 年 4 月）を実施した。

調査項目は、前述したニッキャーシーの著書にあげられた被害よる心理的な項目（2000）や沼崎（2006）による恋愛尺度・心への暴力尺度の項目を参考にし、基本属性、「恋愛観」に関する 20 項目、「親密な交際相手からの高圧的な言葉や態度を含む暴力」の経験に関する 25 項目とした。それぞれの調査項目について、「かなりそうである（5 点）」「いくぶんそうである（4 点）」「少しだけそうである（3 点）」「ほとんどそうではない（2 点）」「まったくそうではない（1 点）」の 5 件法でたずねた。

#### ② IPV における「ことばの暴力」

「ことばの暴力への認識と実際のデート DV の被害経験」について 62 名（女性 34 名・男性 25 名・

未回答 3 名、①の対象者を含む）に追加調査（2016 年 5 月）を実施した。調査項目は、基本属性、交際経験の有無、「ことばの暴力」への認識に関する 16 項目、被害経験に関する 16 項目（認識と同項目）である。「はい」「いいえ」「わからない」の 3 件法でたずねた。

### 6. 調査結果

#### ①若者の恋愛とパートナーとの安全な距離

「大学生の恋愛観とところに対する暴力」の基本属性として恋愛経験をたずねたところ「ある」と答えたのは 73.3%（女性 48 名・男性 29 名）であったが、暴力の経験に関する 25 項目の調査結果を性別で集計したところ、男性が女性よりも恋人間の暴力被害を多く受けている傾向が見られた（図 1 から図 4）。

次に、恋愛観 20 項目を用いて主因子法による因子分析を行った。まず、初期解における因子の固有値の減衰状況および抽出された項目の解釈可能性から考えて、4 因子構造が適すると判断した。次に、

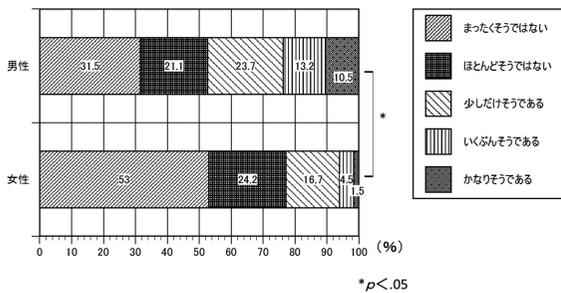


図 1 いつも恋人の機嫌をそこねないように気をつけている

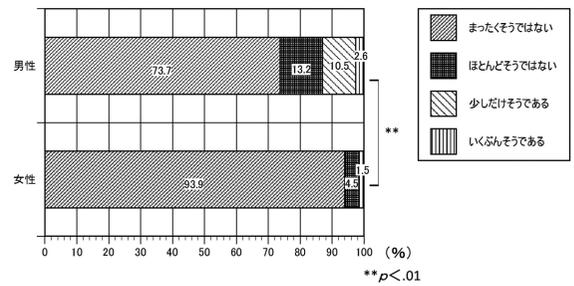


図 2 恋人は、ひどい仕打ちをした後で、優しく愛情いっぱいに接してくる

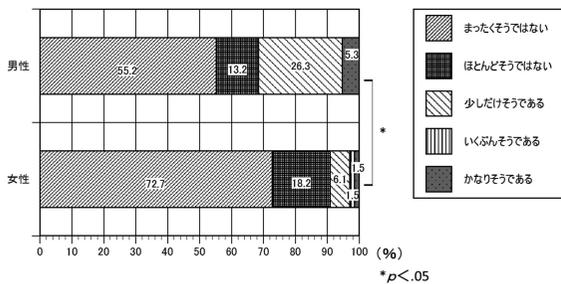


図 3 恋人に嫌われるのが嫌で言うことをきいてしまう

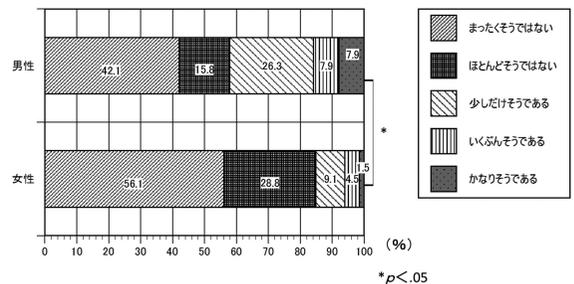


図 4 デートから帰るとどっと疲れが出る

因子を4に固定し、バリマックス回転を施し、因子負荷量が.35未満の3項目の削除を行った。その結果、表1に示すような4因子構造を得た。

第1因子には、「素敵な友だちがたくさんいるので、恋人がいなくても別に寂しくない（逆転項目）」等の一般的な恋愛観を示す項目が高い負荷量を示していることから【恋愛一般型】と命名した。第2因子には、「恋人の声を聞かずにはいられない」「恋人が私がどこで何をしているのか知りたがっているのは、私を愛しているからだ」等の恋愛に執着性を示す項目が高い負荷量を示していることから【恋愛執着型】と命名した。第3因子には、「恋人のことなら私は全部理解できると思う」「恋人は私を愛するようにほかの人を好きになれないと思う」等の恋愛に対する幻想を示す項目が高い負荷量を示していることから【恋愛思いこみ型】と命名した。第4因子には「一人でいるときも素敵だ（逆転項目）」等の恋愛に対する依存性を示す項目が高い負荷量を示していること

から【恋愛依存型】と命名した。

第1因子の信頼性係数は $\alpha=.766$ であり、因子内の項目は十分な内的整合性を備えていた。第2因子、第3因子の信頼性係数はそれぞれ、 $\alpha=.690$ 、 $\alpha=.634$ であったが許容範囲であるとした。しかし第4因子の信頼性係数は $\alpha=.491$ であることから、下位尺度として扱うことを控えた。

因子ごとに各項目の得点の加算平均を算出し、性別で比較したところ、第2因子【恋愛執着型】において、男性の得点が女性よりも高いことが示された( $p<.01$ )。

さらに回答者のうち恋愛経験者を対象に、各因子得点を平均値で高低のグループに分け、暴力経験に関する25項目についてt検定を実施した。その結果、第2因子【恋愛執着型】についてのみ、8項目で有意差が認められた。この【恋愛執着型】傾向が高いグループは恋愛経験者77名中42名（女性では48名中22名・男性では29名中20名）であり、その

表1 恋愛観の因子分析の結果

	因子			
	1	2	3	4
第1因子 恋愛一般型 ( $\alpha=.766$ )				
19. 素敵な友だちがたくさんいるので、恋人がいなくても別に寂しくはない (*)	.754	.197	-.062	.054
13. 以前は何でもなかったことが、このごろできなくなっていると思う (*)	.642	-.012	.164	.185
6. 恋人が離れていっても私は大丈夫だ (*)	.570	.099	.239	.124
9. 恋人は私のいちばんよいところを引き出してくれると思う	.510	.290	.264	-.221
1. 恋人のいない暮らしなど、考えられない	.506	.288	.308	-.067
第2因子 恋愛執着型 ( $\alpha=.690$ )				
8. 恋人の声を聞かずにはいられないと思う	.274	.745	-.160	-.271
11. 恋人が私がどこで何をしているのか知りたがっているのは私を愛しているからだ	.015	.579	.191	.268
5. 恋人がほかの人と楽しくやっているのではないかと考えるだけでみじめに思える	.059	.462	.185	.177
17. 恋人の望むことなら何でもしてあげたいと思う	.403	.458	.206	-.228
10. なぜ恋人が好きなのかわからないが、確かに愛している	.317	.416	.028	-.141
第3因子 恋愛思い込み型 ( $\alpha=.634$ )				
2. 恋人のことなら私は全部理解できる	.170	.084	.689	-.047
7. 恋人は私を愛するようにほかの人を好きになれないと思う	.136	.086	.569	.073
14. 私なしでは恋人はやっていけないだろうと思う	.245	.338	.372	.032
第4因子 恋愛依存型 ( $\alpha=.491$ )				
12. 一人でいるときも素敵だ (*)	.036	.043	.229	.636
16. 恋人がほかの人と過ごした楽しい出来事について聞きたいと思う (*)	-.128	.057	.057	.451
15. 恋人は私が気持ちよく過ごせたらいいと思ってきている (*)	.147	.038	-.209	.417
18. 恋人の欠点を指摘してあげることも時には必要だと思う (*)	.162	-.220	-.096	.402
寄与率 (%)	13.745	11.0960	8.449	7.674
累積寄与率 (%)	13.745	24.841	33.290	40.965

(\*)は逆転項目

割合は、恋愛経験のある女性の46%、男性の69%に相当しており、この結果は、男性が恋人間の暴力の被害を受けている事実を裏付ける興味深い結果となった。

なお、【恋愛執着型】傾向が高いグループにおいて、有意差が見られた暴力経験は、図5に示した「友だちや知人の前で、恋人が私の欠点をあげつらったり馬鹿にしたりする」( $p < .01$ )、図6に示した「恋人だったらこうあるべきといつも口うるさく言われる」( $p < .05$ )、図7に示した「恋人に嫌われるのが嫌で言うことを聞いてしまう」( $p < .001$ )等であった。

前述した金政の指摘にもあるように、青年・成人期の恋愛関係が、二者間の結びつきが非常に強く、母子関係に匹敵するような愛着関係であると仮定するならば、【恋愛執着型】のような不安定な愛着傾向は、第三者の介入を拒む排他性が大きく作用し、「怒り」、「悲しみ」、「不安」といった大きな感情を引き起こしながら、より二者間の関係不安を強め、「嫉妬」や「未練」といった負の結果を引き起こす。加害者被害者の「心理的」「身体的」・「物理的」安全な距離を脅かす。さらに、束縛やデートDVやストーカー事案に繋がる危険性が高まることも理解できる。

また、男性が恋人間の暴力の被害を受けていることについては、「大学生におけるデートDV加害及び被害経験と愛着の関係」(井ノ崎ら・2011)において、「身体的被害の一部及び心理的被害経験数において男性の方が女性よりも多い」との知見がある。そして、その反面「男性が恋愛関係に親密さを強く求めると、暴力行使のリスクも高まる可能性がある」との指摘もある。この知見からも【恋愛執着型】の男性の場合、特に、被害の側にいながらも、加害の側に転じる危険性も高いことが予想される。

## ② IPVにおける「ことばの暴力」

「ことばの暴力への認識と実際のデートDVの被害経験の調査」の基本属性として、恋愛経験をたずねたところ「ある」と答えたのは51.6%で(女性19名・男性17名)、そのうち、恋人間の暴力被害の経験を1つでも選択した割合は、女性34%、男性

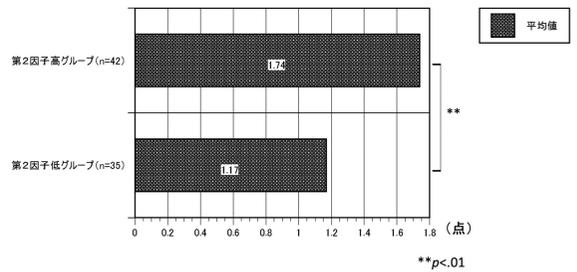


図5 友だちや知人の前で、恋人が私の欠点をあげつらったり馬鹿にしたりする

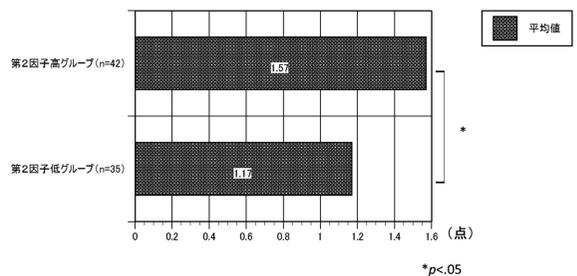


図6 恋人だったらこうあるべきといつも口うるさく言われる

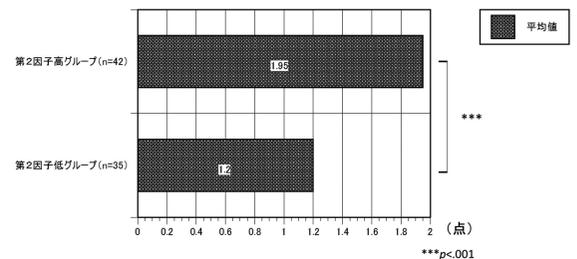


図7 恋人に嫌われるのが嫌で言うことを聞いてしまう

23%であり、被害実態は女性の方が多かった。

中でも、被験者が「ことばの暴力」であると認識していない割合が最も高い「黙っていたらわからないと怒る」の項目については、その認識とは反対に、最多の暴力被害経験の項目でもあり、それを選択したのは全て女性だった。

また、男性では「馬鹿にしたりさげすんだりする」が最多の被害経験として挙げられており、次に「言い訳するなと怒る」「悪口や欠点をあげてののしる」等の項目が続いている。

表2 被害経験の男女の違い

交際経験のある男性の認識と被害経験	暴力だと思う	被害経験	交際経験のある女性の認識と被害経験	暴力だと思う	被害経験
(1) 何を言っても無視する	69.0%	0.0%	(1) 何を言っても無視する	58.8%	6.3%
(2) 大切にしているものを、わざと壊す	95.2%	0.0%	(2) 大切にしているものを、わざと壊す	92.2%	0.0%
(3) おまえ（おめえ・てめえ）ときつい呼び方をする	54.8%	3.8%	(3) おまえ（おめえ・てめえ）ときつい呼び方をする	41.2%	6.3%
(4) 悪口や欠点をあげて、ののしる	85.7%	7.7%	(4) 悪口や欠点をあげて、ののしる	82.4%	6.3%
(5) 大声で命令する	85.7%	0.0%	(5) 大声で命令する	78.4%	0.0%
(6) 言葉や高圧的な態度でおどす	100.0%	3.8%	(6) 言葉や高圧的な態度でおどす	92.2%	3.1%
(7) 行動や家族・友人とのつきあいを制限する	83.3%	3.8%	(7) 行動や家族・友人とのつきあいを制限する	82.4%	15.6%
(8) デート代を一切払わない	59.5%	0.0%	(8) デート代を一切払わない	51.0%	0.0%
(9) 大学やサークルに行くなと言う	90.5%	3.8%	(9) 大学やサークルに行くなと言う	82.4%	6.3%
(10) 自分と友だちのどっちが大切なんだと言う	59.5%	3.8%	(10) 自分と友だちのどっちが大切なんだと言う	49.0%	15.6%
(11) 言い訳するなと怒る	54.8%	7.7%	(11) 言い訳するなと怒る	43.1%	6.3%
(12) 黙っていたらわからないと怒る	45.2%	0.0%	(12) 黙っていたらわからないと怒る	39.2%	21.9%
(13) 馬鹿にしたりさげすんだりする	83.3%	11.5%	(13) 馬鹿にしたりさげすんだりする	76.5%	6.3%
(14) 自分勝手（ジコチュー）だと非難する	50.0%	3.8%	(14) 自分勝手（ジコチュー）だと非難する	39.2%	3.1%
(15) いろいろな決まりや約束をさせられる	69.0%	7.7%	(15) いろいろな決まりや約束をさせられる	68.6%	12.5%
(16) 手を振り上げ、叩くふりをする	78.6%	3.8%	(16) 手を振り上げ、叩くふりをする	76.5%	0.0%

## 7. 考 察

今回実施した調査の中で、男性が女性よりも恋人間の暴力被害を受けている傾向が強く見られたことは、大変興味深い結果である。今回の調査を通じて、「いつも恋人の機嫌をそこねないように気をつけている」（図1）や「恋人に嫌われるが嫌で言うことを聞いてしまう」（図3）、また「別れようと思うたびにやさしくされたりするので、態度を改めてくれると希望をもつ」と答えたのは予想を反して、圧倒的に男性であった。

現在の若者の恋愛事情においては、男性は常に交際相手の女性に「気を使っている」のであり、「恋人の希望に合わせようとしてがんばってしまうので、デートから帰るとどっと疲れがでる」と答えている。この結果を踏まえてみると、男性が恋愛に対して、億劫になるのも理解できないこともない。本調査について、アンケートに協力した学生たちに講義で結果の報告をした際、その場の男子学生達は、男性が恋愛関係において、パートナーに対して大変気を使っており、重ねて暴力の被害も受けているという

調査結果に対して、頷き共感した様子を見せた。

しかし、ここで注意しなくてはならないのは、恋人間の暴力において、重篤な暴力の被害に遭っているのは、やはり女性の方であるという点である。

内閣府の「男女間の暴力に関する調査」（2014）においても指摘されているところであるが、恋人間で発生する暴力において、女性の約5人に1人は交際相手から被害を受けたことがあると答えており、さらに、交際相手と同居（同棲）経験がある女性の約3人に1人は被害を受けたことがあると答えている。そして、被害を受けた女性の約4割はどこにも相談できていない。

さらに、被害を受けた女性の約4人に1人は命の危険を感じた経験があると答えており、重篤な暴力の被害を受けていることがわかった。なぜそのような過酷な状況の中で、被害者が加害者の元に留まってしまうのか、その解明が重要であるが、被害者の多くが、暴力について相談できていない影響は大きい。本調査でも、被害者の約半数が「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」と答えている。親密な愛着関係は、「心理的」「身体的」「物理的」な

安全な距離を脅かし続け、密着した関係の中で、被害を重篤化する。誰にも相談できないままに、加害者も被害者も、暴力を否認し矮小化しながら関係を続けていく。「暴力のサイクル」によって、被害者の心理的な監禁状態は悪化する。加害者からの「心理的な洗脳」状態に陥る。そのような状況の中で、自尊心を傷つけられ、無気力な状態に追い込まれる(ハーマン・1996)。

そのような状況に陥らないためには、親密な恋愛関係における健全なパートナーシップのあり方やそこに潜む暴力のリスクについて事前に知っておくことが重要である。そのためにも、早い段階で、当事者である被害者や加害者自身が、二者間に起きている暴力のサインに「気づくこと」が大切である。

また、被害者の相談相手の多くは友人なのだから、不健全な暴力的な関係の第一発見者も、身近にいる友人なのである。「あの二人の関係は大丈夫なのかな」と気づくためにも、恋愛間の暴力の特性と解決の方法について、基本的な知識を若者のだれもが持っていることが求められる。

ジェンダーの非対称性の影響が強い日本社会においては、一般的には「女性は黙っている」という価値観が支配的であり、女性は沈黙を強いられがちである。しかし本調査において新たに示された知見は「沈黙すると怒られる」という実態である。また、そのこと自体を被害当事者である女性も、加害者である男性も、共に「恋人間の暴力」であるとは認識していない。

その一方で、女性は男性を攻撃する際に、「馬鹿にしたりさげすんだりする」や「悪口や欠点をあげてののしる」に示されたように、攻撃としての「ことば」を用いてパートナーのプライドを傷つけている。ここにもまた、ジェンダー間の非対称性が横たわっているように思われる。

今後は、親密な関係で起こる「ことばの暴力」と

ジェンダーとの関連をスクリーニングできる質問紙の作成を通して、パートナーの「こころに対する暴力」に敏感な視点を持つための情報提供に繋げる。

#### 引用文献

- バリー・レビー (2008) 「恋する前にデートDVしない・されない10代のためのガイドブック」アウェアFネット支援の会
- 畑下博世・上間美穂・但馬直子・菱田知代 (2005) 「“デートDV” 文献レビュー」保健師ジャーナル Vol.61 No.11 1077-1083
- 伊田広之 (2000) 「デートDVと恋愛」大月書店
- 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子 (2012) 「大学生におけるデートDV加害及び被害経験と愛着の関係」学校危機とメンタルケア第4巻 49-64
- ジニー・ニッキャーシー&スー・ディビッドソンむらさき工房訳 (2000) 「夫・恋人の暴力から自由になるために」パンドラ株式会社
- ジュディス・L・ハーマン (1996) 「心的外傷と回復」みすず書房
- 金政祐司 (2006) 「愛着関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について」社会心理学研究 第22巻第2号 139-154
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015) 「第15回出生動向基本調査」概要
- 小西聖子 (2001) 「ドメスティック・バイオレンス」白水社
- 美嘉 (2006) 「恋空(上) 一切ナイ恋物語」スターツ出版
- 内閣府 (2014) 「男女間における暴力に関する調査」
- 沼崎一郎 (2006) 「女子大生のための性教育とエンパワメント」[ジェンダー論]の教え方ガイド」フェミックス
- 大藤恵子 (2008) 「10代のデートDV Teen Dating Violence ①」季刊 SEXUALITY No.36 172-175
- 友田尋子 (2007) 「ドメスティック・バイオレンス」日本母性衛生学会 第47巻第4号 3-7
- 渡辺裕子 (2010) 「大学生における現代的恋愛の諸相(Ⅱ)―1990年代の調査との比較」駿河台大学論叢 第41号 105-129
- 山口のり子 (2003) 「デートDV防止プログラム実施者向けワークブック―相手を尊重する関係をつくるために」木の梨舎

#### 付記

本論文の一部は、日本語ジェンダー学会第17回年次大会において発表されている。